令和３年度　教育活動等に対する学校評価書

令和４年３月４日　　学校法人大村学園　かわはらいづみ幼稚園　　園 長　稲葉　博
学校関係者評価委員長　　古谷　友利

１　幼稚園の教育目標　　明るく元気な子　～ 明るくたくましい心身共に健康で情操豊かな人間としての基礎をつくる ～

①　元気に登園する子　　②友だちとなかよく遊ぶ子　　③元気にあいさつをする子　④好き嫌いをしないで食べる子

２　本年度の重点目標　　計画性のある保育実践・笑顔で保育実践・信頼される保育実践

３　自己評価結果とそれに対する学校関係者評価結果　（　A・十分に成果があった　B・成果があった　　C・少し成果があった　　D・成果がなかった　）

評価対象	評価項目	自己評価		学校関係者評価委員会	
		評価点	反省と改善策	評価点	意見
教育目標	教育目標の具現	A	子どもたちが嬉々として登園し、教師や友だち、遊具や玩具、自然物等の環境と関わり合いながら楽しく園生活を送れることを第一に全職員で共通理解を図り、子どもの活動や遊びの環境構成を工夫している。今後も、教育目標「明るく元気な子」をめざし、教育の質の充実を図っていきたい。	A	評価委員が訪問した際にも、人懐こく話しかけてくるなど、自然体で遊ぶ子どもたちの姿を見て好感がもてた。さらに、友達とふれあいながら生き生きと遊ぶ園児の姿もあちこちで見られた。目標の達成度は高いと評価する。今後とも、教育目標を意識した教育経営を推進していってほしい。
本年度の重点	計画性のある保育実践	B	本年度も、夏から秋にかけ、新型コロナウイルスによる感染の拡大やそれに伴う「緊急事態宣言の発令」を受け、教育課程や教育計画において大幅な変更を余儀なくされた。そのため、教育活動における狙いや内容が縮小されたり変更されたりした。改めて、教育活動を計画的に推進していくことの大切さを実感している。	B	昨年度に続き、本年度も新型コロナウイルスによる教育活動の変更など、先生方の苦労も尋常ではなかったことと思う。こうした経験を通して、「日常の保育が計画通り行われる」ということはいかに貴重で有難いことか、保護者も子どもも実感している。
本年度の重点	笑顔で保育実践	A	教職員が、常に笑顔で、優しい言葉掛けを実践することで、子どもや保護者との信頼関係や良好なコミュニケーションが生まれ、互いの信頼が深まる。今後も「和顔愛語」の精神、「子どものよさや努力を認め伸ばす気持ち」を忘れずに保育や接遇に臨んでいきたい。	A	本園の先生方の素晴らしいところは、いつも笑顔を忘れず、どの子どもにも優しく接してくれるところです。そのため、どの子どもも安心して園生活を送ることができています。こうした子どもの姿から、親の幼稚園への信頼が生まれます。「教師は最大の教育環境である」といわれるように、保育者は常に笑顔で子どもの保育に当たってほしいと思います。
本年度の重点	信頼される保育実践	B	子どもや保護者とコミュニケーションを密に図ることはとても大切なことである。しかし、現実には「徒歩通園児」と比べ、「バス通園児」の保護者と教員が接する機会が少なく、園児の保育中の事故や怪我の説明、対応等で苦慮する教員もいた。主には、電話や連絡帳で連絡をとるが、日常は、クラス便りやHP、ブログ、参観会、面接などを利用して、子どもについての情報の受・発信に努めることが肝要であると考える。	A	「バス通園児」の保護者には「徒歩通園児」の保護者に比べ、園児の情報を伝える点で難しい面があるのはやむを得ないと思いますが、保護者面接やクラス便りやＨＰ、ブログ、パステル apps、連絡帳等を有効に活用し可能な方法で情報発信や対話の機会を確保していってほしいと思います。
子育て支援	預かり保育 （あさやけ教室、 ゆうやけ教室）	A	預かり保育（「あさやけ・ゆうやけ教室」）では保護者の要望を受け、預かり時間を朝８時から夕方１８時まで延長し喜ばれている。さらに、夏休みや冬休み・春休み等の長期休業中も「開室日数」を大幅に増やすなど改善を図り実施している。	A	「ゆうやけ教室」や「あさやけ教室」を子どもたちは大好きです。それは、満３歳児から年長児まで異年齢の友達と一緒に触れ合ったり、日常の保育では味わえないような遊びを体験できるからです。 保護者からもきめ細やかな教師の対応や子どもの様子の伝達が好評であるとの声が聞かれます。 保護者のニーズに応え、積極的に「開室時間」や「開室日数」の拡張等改善を図ってくださったことはおおいに評価できます。

４　今後取り組むべき課題

課　　題	具体的な取組方法
「計画性のある保育実践」の遂行と 行事の吟味	今年は、新型コロナウイルスによる感染拡大の影響を受け、「保育室の換気」や「備品や玩具等の消毒」の日常化及び「三密対策」等、行事内容や形態の見直し変更等を余儀なくされた。そうした制約の中、教育活動を推進するのは時間も労力もかかり、大変困難ではあったが、考えようによっては、教育活動の原点を見直すことにも繋がり、決して無駄ではなかったと考えている。今後も、柔軟かつ本質を押さえた教育活動を推進していきたいと考える。